

Ref Doc 880

辯護團側文書八八〇

國務省

寺岡調査及び情報局

調査及び文析課

調査及び文析第二五五八。四

日本ノ軍需産業

第四部

造船事業

記事

日本ノ造船事業ノ討究、國體的構造及び政府統制ノ
歴史ヲ主トシテ取扱フ。亦該工業ノ能力及ビ工學的
部面ヲモ論ズ。

一九四五年ノ昭和二十年ノ十月三十一日

米。。。。。米。。。。。米

一九四四年ノ昭和十九年ノ中頃迄ニ日本ノ商船及
ビ海軍船舶ノ損害ノタメ航洋船舶數ガ激減シタノデ
日本ハ各地ニ置カレタ軍隊ノ補給及び一九四三年ノ
昭和十八年ノ工業生産ノ水準ヲ維持スルニ必要ナ
原材料ノ運搬ニ必要ナ輸送ノ途ヲ失ツタ。此ノ損失
ヲ埋合セルタメニハ一九四四年ノ昭和十九年ノニ於
テ少クトモ二百五十万噸トシテ割テ商船ヲ建造シナ
ケレバナラヌコトトナツタ。

日本ノ帝國議會（一九四五年ノ昭和二十年ノ九月
五日）ニ依ツテ明カニサレタ最近ノ數字ハ日本ガ終

戦時ニ於イテ喪サレメ可動商船トシテ數(一〇〇トシテキル。以上ハ位カニ二十万トシテ余シカナカツタコトヲ示シテキル。

戦時中ノ軍艦建造及ビ損失ニ關スル議會ノ數字ハ第十表ニアル。

I 此ノ數字ハ連合軍ノ同情及ビ日本ノ經濟再建ノ爲ノ助力ヲ得ンガメニ少シク低目ニ出シテアルカモ知レナイ、例ヘバ其ノ總計ノ中ニハ可動トシテ上廻ル修理中ノ船舶ノトシテ數ハ合マレテキナイ。
B、造船事業ノ組織

I 概略ノ歴史及ビ經濟的考察

a 一九三二年ノ昭和七年ノ度迄ノ觀察

日本ノ造船事業ノ安定性ト轉換性トニ就イテノ個々ノ問題ノ考察ニ加ヘテ、如何ナル程度迄該工業ガ經濟的ナラサル線ニ沿ツテ發展シタカヲ決定スル目的ヲ以テ我々ガ歴史的二且ツ簡單ニ日本ニ於ケル造船事業ノ經濟的方面ヲ觀察スルコトガ必要デアル。

一八六八年ノ明治元年ノ維新以來、日本政府ハ船舶ノ問題ニ細心ノ注意ヲ拂ヒ一八九五年ノ明治二十八年ノ中日ニ於ケル戦争ノ直後政府ハ一八九六年ノ明治二十九年ノニ制定サレメ法律ニ則ル助成金ノ計畫ニ乘リ出シタ。

第一次世界大戦當時、(一九一九年/大正八年)ノ一六一万二千總トンノ商船ガ進水シ、大戦中ノ異常ナ好景氣ノ状態ハ獎勵金ノ必要度ヲ減ジタ、然シソノ後間モナク運用サレタ獎勵金ノ年額ハ一九一四年/大正三年ノ規模ニモドル傾向ヲ示シタ。

一九二〇年代ノ間、造船工業ハ長期ノ不況ニ入ツタ。一九二七年/昭和二年/ニ於テ、商船建造ハ四万二千總トンノ低キニ迄後落シタ。ソシテ運用サレタ助成金ハ年額約一千万圓ニ達シタ。此ノ間政府ハ直接造船助成金ヲ支拂ツタノテハナク、國內ノ鋼鐵生産ニ對スル獎勵金及ビ或ル種ノ輸入税ノ免除ニヨツテ造船業者ヲ補助シタ。一九二九年/昭和四年/政府ハ造船ノタメニ、容易ナ條件ノ貸出金ノ形ヲ船舶ノ助成計畫ヲ立テタ。三千万圓ノ貸出基金ガ利用サレ得ルコトニナツタ。然シツイテ起ツタ世界的經濟不況ニヨリコノ便宜モサシテ役ニ立タナカツタ。ソレカラ緩慢ナ増加ガハジマツタ。増加ノ割合ハ一九三〇年代ノ初期ニ於テ政府ノ商船建造助成計畫ニヨツテ大イニ促進サレタ。政府ノ指導ノ下ニ日本ノ航路ハ、世界ニ於ケルソノ級ノ如何ナルモノニモ遜色ナキ快速貨物船ヲ獲得シタノデアアル

船舶
 船舶及ビ造船計畫、一九三〇年代ニ於ケル造

一九三二年ノ昭和七年ノ日本政府ハ重大ナル決定ヲシメ、即チ日本ノ商船隊ノ不利ヲ船齡分布ヲ改善シ、且ツ船舶事故ノ回數ヲ減少スルメニ、政府ハ「廢船及ビ造船」三計畫中ノ第一ノモノヲ決定シメ。一九三二年ノ昭和七年ノ十月一日現在テ實施ヲ見ル第一計畫ハ、獎勵金下附ヲ得テ建造サレル新船每一トシニツキ船齡二十五年又ハソレ以上ノ船舶ノ二トシヲ層級トスルトイフ條件ノ下ニ、二十萬總トンノ新船建造ヘノ途ヲ開イタ。新船ハ各々四千總トン或ハソレ以上デ、少クトモ十三ノット半以上ノ速力ヲ出シ得、且ツ日本ノ造船所テ作ラレルコトヲ要シタ。

コノ計畫ハ、約四十萬總トン、九十四隻ノ船舶ヲスクラツプ化シ、約二十萬總トンノ三十一隻ノ新船ノ建造ヲ見ルト云フ結果ヲ生シタ。

三十一隻ノ船舶ヲ建造スルニ要シメ經費ハ五千五百万圓弱ト見積ラレタ。政府ノ助成金ノ總額ハ一千一百万圓近クデアツタ。

ソレゾレ一九三五年ノ昭和十年ノ一九三六年ノ昭和十一年ノニ制定サレタ第二、第三ノ

計費ハ第一ノヨリハ小規模ノモノデアツタ。
二者ヲ結合シテ結果ハ、十萬噸トンノスクラ
ップ化、約十萬噸トン、十七隻ノ船舶ノ建造
トナリ、助成金ノ割合ハ、第一計費ノ際ノ半
分強デアツタ。建造サレタ船舶ハ四千トン或
ハソレ以上ノ噸噸噸噸噸噸噸噸噸噸噸噸噸噸
以上ノ速力ヲ出スコトガ出来タ。

(以下次頁)

Ref Doc 880

一九三七年初迄ニ廢棄並建造ニ關スル三計畫ハ約五十万舊英噸ノ廢棄及ビ四十八隻ノ新高速船約三十万英噸ノ建造ヲ終ツテキタ。是等ノ四十八隻ノ中ニハ四千英噸以上テ建造後五年以内ノ日本船舶ノ總數ノ五分ノ四モ含マレテ居ル。當時日本ハ所有總噸數ニ對スル割合ニ於テ船齡五年以内ノ船舶噸數ヲ如何ナル他ノ國ヨリモ多ク所有シテキタ。

次表ハ船舶改良三計畫ニ關シ建造乃至廢棄サレタ船舶ヲ示ス。

第一七表

計畫 數	船舶改良三計畫ニ關シ建造乃至廢棄サレタ船舶		會計年度
	總噸數	總噸數	
第一次	三一	一九八八八九	一九三一—三二
第二次	八	四九七六〇	一九三三—三五
第三次	九	五〇六九〇	一九三六—三七
總計	四八	二九六四三九	一九三一—三五

註 第三次計畫テ實際ニ解体サレタ船舶ノ數ヲ示セルコトハ出來ナカツタ。

船舶改良三計畫ノ費用ハ一四〇〇万圓（四〇六二八、〇〇弗）ニ上リ、中第一次計畫一〇〇万圓、第二次及第三次計畫各一五〇万圓テアツタ。

一九三七年四月ニ第四次計畫ガ實施セラレ、或場合

Ref Doc 880

ニハ建造費ノ半バニモ上ル補助金ノ割合テ、六〇〇〇
英噸及速力十九節ヲ下ラザル優秀旅客並ニ貨客定期船
ノ建造ヲ準備シタ。一九三七年七月ノ官報ノ附録ニ、
客船一五万英噸及ビ貨客船一五万英噸ノ建造ノタメニ
ハ、次ノ四年間ニ支拂ハレルダラウ補助金ハ十八年
ニ跨ル賦拂金ニヨツテ支拂ハル、モノデアアルガト云フ
コトガ述ベテアル。一九三七―三八年ニ始マル十八ヶ
年間ニ亘ル本計畫ニ總計五千萬圓以上ノ支出ガ提案サ
レタ。 / 四頁ノ

。。。。。。。。。。

第十八表ハ一九一三年ヨリ一九三八年ニ至ル間ノ或ル
特定ノ年ニ於ケル一〇〇噸以上ノ潜水船舶ノ總計ヲ示
ス

Sup Doc 880

第十八表

海水面船ノ總計（噸數）

年次	隻數	噸數
一九一三	一一二	六四、六六四
一九二〇	一四〇	四五六、六四二
一九三〇	三七	一五一、二七二
一九三二	四四	五四、四二二
一九三四	一五五	一五二、四二〇
一九三六	一八〇	二九四、八六一
一九三七	一八〇	四五二、一二一
一九三八	一四六	四四一、七二〇

出典、日本ノ造船一九四〇年（日本經濟年報）

一九三〇年代中期ノ傾向ハ越洋航路旅客定期船ハ建造ニ関ツテ居タ、然シ中口トノ競争勃發後造船ハ造船業ハ船舶ニ對スル要求ガ越洋大型船カラ沿岸貿易用ノ中小型船ニ轉換シタコトヲ直接反映シタ。一九三九年五月末迄ニ發セラレタ注文總數中一六五隻ノ貨物船ノ總噸數ハ八〇八、六七〇噸デアツタ。其等ノ中七、〇〇〇噸級以上ノ船舶三四隻ノ總噸數ハ

8

Ref Doc 880

三〇六、六〇〇噸デ六、〇〇〇噸以下ノモノ一三三
隻ノ總噸數ハ五〇二、〇七〇噸デアツタ。一九三八
年十一月三十日、即チ六ヶ月以前ノ數字ニ比較シテ
前者級ノ船ハ隻數ニ於テ二、噸數ニ於テ二七、九三
〇噸ノ減少ヲ示シタ。然シ後者級ノ船ハ隻數ニ於テ
八五、噸數ニ於テ三二五、四二〇噸ノ増加ヲ示シタ。
第十九表ハ一九三二年ヨリ一九三八年ニ至ル間ノ一
〇〇〇噸疊ノ進水船ヲ示ス。此處ニハ特別ナ變化ハ
殆ド見ラレナイ

第十九表 (次頁)

(五頁)

Ref Doc 880

噸數別	一九三二	一九三四	一九三六	一九三七	一九三八
10000	1	1	2	1	1
9000	1	2	1	1	1
8000	2	1	2	1	1
7000	1	9	3	1	5
6000	2	3	6	9	1
5000	1	1	4	6	3
4000	1	2	9	1	1
3000	1	1	9	8	7
2000	4	2	7	1	1
1000	1	1	1	2	1
總計	10	20	63	93	77

噸數別	噸數	%	噸數	%	噸數	%
10000	1500		1800		25820	
9000	1500		19730		36800	
8000	16800		55		17550	
7000	12000	20	25		21500	
6000	12000		25		36200	
5000	12000		25		21500	
4000	12000		25		38930	
3000	3500		9		31510	
2000	6900	60	20		19050	
1000	1500		18		25820	
總計	45760		118180		272710	

噸數別	噸數	%	噸數	%	噸數	%
10000	1500		1800		25820	
9000	1500		19730		36800	
8000	16800		55		17550	
7000	12000	20	25		21500	
6000	12000		25		36200	
5000	12000		25		21500	
4000	12000		25		38930	
3000	3500		9		31510	
2000	6900	60	20		19050	
1000	1500		18		25820	
總計	45760		118180		272710	

○、海軍建造。商船建造トノ比較

海軍艦船建造ハ次表（第二十表）ニ示サレル如ク、此ノ期間ニ勿論又カラ入レラレタ。商船ノ進水モ亦此表ニ載セテアル、此等ノ数字ト表ニ第十九表ニ示シタ数字トノ間ニ少シ違ツタ所ガアルコトニ氣ガ付クコトト思フ。斯ノ如キ差異ハ大シタ意味アルワケデナク、主トシテ異ル出典ノ資料ニ依ツタコトヲ反映シテ居ル。下ニ記載スルモノハ一九四〇年マデノモノデアアル

第二十表

日本並ニ日本ノ統制下ニアル領土内ノ造船所テ進水セル鋼鐵商船及ビ海軍艦船ノ總噸數

一九三四 — 一九四〇

海軍艦船		商船	
(噸數ヲ表ハス)		(英噸)	
一九四〇	一五七、五一〇	二〇八、〇一四	
一九三九	一、一八、七九〇	三四二、八八〇	
一九三八	五三、八一二	四三八、八九〇	
一九三七	五二、二五八	四八七、三五七	

一九三六	五三、三〇五	三〇五、八〇三
一九三五	三九、七六二	一四五、九〇一 註参照
一九三四	三八、二七四	一五四、八六〇 註参照

出典 グラスゴーヘラルド、貿易年鑑、一九三六年一九三七年一九三八年號

ロイド船籍簿、ロンドン、一九四三年三月ニ受ケタル資料ニ依リ特ニ表ニ作リ上ゲタモノ

ジェーン、軍艦、一九四一年刊、オリエンタル、エコノミスト、(東京)一九三六年四月號

註、日本々土ノ建造高ノミヲ含ム。

二、政府ノ奨励及管理諸法律

a、1「造船事業法、中國及歐洲戦争ハ日本ノ軍用船舶ノ大規模ナ増強ヲ必要トシタ。船舶ノ戦争ニ依ル損失ハ中立國船舶及世界船舶ノ減少ト共ニ之ヲ補填スルコトガ必要デアツタ。日本ハ以後ノ造船ニ就イテハ大部分自國ノ能力ニ依存セネバナラナカツタ。コノ新タニ生起シタ情勢ニ對處スルタメ、日本ハ臨時船舶管理法、造船事業法並ニ造船統制法ヲ初メ數種ノ重要ナ船舶關係法律ヲ制定シタ。之等法律ノ内、最も重要ナノハ造船事業法デソノ性質並ニ機能

ヲ詳述スルコトハ當ヲ得タモノト思フ。本法ハ日本ノ半官邊筋ガ次ノ様ニ説明シテキル。

1 一九三九年第七十四議會通過

(1) 本法ノ目的 本法ノ目的トスル所ハ國防上ノ見地カラ低價格ニヨル船舶供給ヲ増大シ、十分ナル造船能力ノ維持ヲナスニアル。一九三九年第七十四議會ヲ通過シタ本法ハ造船事業ノ政府ニヨル保護、統制ノ措置ヲ規定シテイル。

(2) 政府管理 本法ニ據リ造船事業ハ嚴重ナル政府ノ管理下ニ置カレル。新規企業ノ設立、合併及造船會社ノ事業ノ中止ハ政府ノ許可ヲ受クベキコトトナル。

(3) 造船業者ノ特權 乍併造船業者ハ土地收容權ヲ與ヘラレ又拂込株金ノ二倍額迄ノ社債ヲ發行スルコトヲ許サレル。政府ハ未ダ此ニ於テ製造サレタコトノナイ船體、機體、及ビ機裝品ノ製作ニ關シ指示ヲ發シ得、且ソノ場合獎勵金ヲ交附シ得ル。政府ハ又造船業者ニ船體、機體及機裝品ノ製作ニ當リ製品ノ使用ヲ命ズルコトガ出來ル。政府ハ性能ノ規格ヲ定メコノ規格ニ適合シナイ製品ヲ不合格トスルコトガ出來ル。

(4) 政府助成金及損失補償金 造船事業振興上必

要ナ場合、政府ハ造船業者或ハ船舶所有者ニ助成金ヲ交附シ得ル。政府ハ公共ノ利益ノ爲造船業者ニ船舶、船体、機關及機裝品ノ價格並ニ修繕料等ノ變更ヲ命ズルコトガ出來ル。政府ハ又公益上必要アリト認ムルトキハ設備ノ新設、増設又ハ改良、船舶、船体、機關及機裝品ノ修繕、並ニ特殊事項ノ研究施設ノ設立ヲ要求スルコトガ出來ル。政府ハ造船事業ガ之等命令ノ實施ニ當リ蒙ル損失ニ對シ補償金ヲ支拂フコトガ出來ル。」

(5) 強制的企業組合ヲ組織スル權利 本法ハ又共同購入、資材ノ管理、共同ノ使用ニ供スル施設ノ設立、組合員ノ事業活動ノ統制及共通ノ利益ノ爲ノ研究事業ヲ目的トシ造船業者ガ共同組合ヲ組織シ得ル如キ條項ヲ含ンデヤル。政府ハ是等組合員ニ規定ニ從フコトヲ命ジ且組合外業者ヲ組合ニ加入セシメルコトガ出來ル。最後ニ政府ハ本事業ノ健全ナル發達ノ爲該組合組織ニ對シ何等カノ事業ヲ行フベキコトヲ命ジ得ル。」

基本的造船法規、斯ク一方ニ船舶、及ビ造船ニ關シ統制ヲ強化スルト共ニ他面日本ハ一九三九年貨物船建造ヲ奨励スル爲貨物船ノ規格ヲ示ス六ツノ標準ヲ採用シタ。之ニヨリ新タナ國家的船舶政策ガ起

リ、ソレニ從ツテ多數ノ企劃ガ實行ニ移サレタ。

年併一九四一年十二月七日ノ余波トシテ日本ノ造船ノ一層急速ナル増強ノ要求ガ起ツタ。コノ情勢ニ對應スル爲、一連ノ基本的、組織的造船法規ガ採用サレ一九四二年五月公布サレタ。是等法規ハ、造船業者ガ政府ノ企劃ニ從ヒ、政府ノ強力ナル援助ヲ受ケテ一定ノ期間内ニ、要求ガ容認スルダケノ量ノ船舶ヲ建造セネバナラヌトイフ假定ノ下ニ作成サレタ。本計畫實現ノ爲次ノ如キ技術的條件ガ肝要ト考ヘラレタ。

(i) 決定シタ標準型船舶建造ノ爲、船体、機關裝備及其他部分ノ一定ノ仕様書ヲ必要ナ圖面ト共ニ造船業者ニ供給スルコトデアツタ。ソノ目的ハ船舶ノ大量生産ヲ容易ナラシムルコトニアツタ。之ハ要スルニ過去ニ於テ異ナツタ造船業者ガ個々ノ考案、企劃及圖面ヲ呈出スル場合ニ生ジタ様ナ困亂ヲ來サシメ又爲、企劃ヲ標準化スルコトデアツタ。

(ii) 非標準型船ノ注文ニ關シテハ客船建造ノ如キ特殊ナ場合ヲ除キ一般ニ建造ハ引キ受ケヌコトトナツタ。

(iii) 各スベテノ造船所ニ最高ノ能率ヲ發揮サセル爲各造船所ハ標準化計畫中ノ一定ノ級ノ船舶建造ヲ指

定サレ、ソノ型ノ建造ヲ専門トスルコトニナツタ。
 全部デ十九級アツテ次ノ通りデアル。即チ貨物船ハ
 六階級、油槽船ハ三階級、鑽石輸送船ハ一階級、木
 造船ハ五階級、木造浮船ハ四階級デアル。是等ノ級
 ハ次ノ如ク區分シテマール。

貨物船

A 型	B 型	C 型	D 型	E 型	F 型
總 電 數	總 電 數	總 電 數	總 電 數	總 電 數	總 電 數
六、三〇〇 屯	四、四〇〇 屯	二、七〇〇 屯	一、九〇〇 屯	八三〇 屯	四九五 屯

油槽船、總屯數、一〇、〇〇〇屯、五、〇〇〇屯、一、〇〇〇屯
 鑽石輸送船、總屯數、五、五〇〇屯

上記船舶ハ鋼造船デアル。之ヨリ小型ノ船ハ鋼鐵
 不足ノ爲木造デアル。是ハ戰時標準型木造船ト稱サ
 レテル。是ハ二種類ニ區分シ得ル。

木造貨物船	輕量木造船
總屯數二五〇屯、二〇〇屯、一五〇屯、一〇〇屯、七〇屯	積載屯數、三〇〇屯、二〇〇屯、一五〇屯、一〇〇屯

C 其他ノ合理化措置

各造船業者ガ標準造船計畫ニ從ツテ行フ外ニ、
次ノ諸點ガ強調サレタ。

(i) 造船用鋼材ニ對スル標準規格、(ii) 代用資材ノ
使用範圍ヲ極度ニ擴張スルコト、(iii) 船體機件及ビ
裝備品ヲ簡單化スルコト、(iv) 電氣銲接使用範圍ヲ
擴張スルコト、(v) 造船術ヲ改善シ以テ全般ニ亘リ資
材ヲ節約スルコト

三、監理

A. 海軍省一九四二年二月五日政府ハ造船業ニ關
スル權限ノ戰時特別取扱ニ對スル勅令ヲ發布シ
タ、コレハ造船用重要資材ノ需要供給ヲ調整ス
ル爲造船業ノ權限ヲ制限シ（即チ優先權ヲ設定
シ又(B)戰時ニ限り商船ノ建造及ビ修理ニ關スル
（從來通信省ノ掌握シテキタ）權限ヲ海軍省ノ
權限ニ委譲スルコトデアツタ。

コノ變更ハ建艦資材ト商船建造用資材トノ間ニ
弾力性ヲ有タセタ外ニ二ツノ建造計畫ヲ單一系ト
ナシ且ツ全般的ニ兩者ヲ調整シヨウト企テタモノ

デアアル、ソノタメニ軍艦及び商船ノ建造ハ根本的ニ同一基礎ノ上ニ置カレルコトニナツタ但シ建造スベキ軍艦及び商船ノ比率ノ問題ハ資材ノ有無、建造設備及び營面ノ要求ト睨ミ合セテ、一元的企业ニヨツテ統制サレルコトガ望マシイカラデアツタ。

然シ海軍省ノ決定スルノハ一般設計費ダケデアツテ、何ノ造船ニ發註シ且ツ資材ヲ割當テルカハ、一方ニ於テ産業設備營團又地方ニ於テ造船統制會ノ掌ル所デアツタ。

B 産業設備營團 上述ノ如ク標準生産及び一元化設計ノ組織ニ於テハ、單一權威者ヨリ建造命令ヲ發スルコトハ止ムヲ待ナイコトデアリ、而シテコノ單一發註權威者ノ役ヲ行使スルタメニ設定サレタ機關ハ産業設備營團デアツタ、コノ團策會社ハ政府ノ造船計畫ニ基ク臨時規格船建造案ヲ踏襲シ、各造船所ト契約ヲ行ツタ。

コレ等ノ仕事ノ外ニ該營團ハ日本ノ造船業者ニ對スル金融及び損失補償ノ主タル機關トナツタ、右ハ事實上該産業ヲ補助スルト共ニ損失ノ

場合ニハ凡テ政府ノ負擔ニ於テ補償ヲ行フ機關
デアツタ。

コノ管國ノ規定ニ依レバ國家ガ船舶ヲ必要ト
スル限リ其所要額ヲ引受クベキコトニナツテキ
ル政府ハ一方ニ於テ新船建造費ノ一部ヲ直接國
庫負擔トナシ又他方ニ於テ建造用流動資金ヲ供
給スルコトニ依リ、コレヲ達成セントスルノデ
アル。政府ハ損失補償ニ關スル勅令ヲ改正シ、
供給シ得ル流動資金ノ限度ヲ各造船所ノ資本金
ノ三分ノ二ヨリ五分ノ四ニ引上げタコレ等ノ規
定ノ適用範圍ヲ引下ゲ、政府ハ小型戰時規格船
トシテ分類サレテキル凡ノ船舶ニモコレヲ適用
シタ、又資本ノ損失ニ對シテハソノ金融機關タ
ル日本興業銀行ヲ通シ補償ヲ均分シタ、(建造
資金ノ金融ニ關連シ他ノ政府代理者ニヨリ融通
サレタル資金ノ外ニ一九四二年中日本銀行ガ融
資シタト云ハル、金額ガ一億九千二百萬圓ニ上
ツタコトハ興味アル點デアル。)

竣工セル船舶ニ對シテ國家ガ不用トナリ而シテ
管國ガ民間用トシテ拂下ゲル場合ニハ、管國ノ
蒙リタル損失ニ對シテハ政府ガ補償ヲ行ヒ而シ

テ標準建造價格及ビ拂下ゲ價格ハ政府ガコレヲ決定スルヤウニ取極メテアツタ。

融資方針ヲ確立スル一方上述ノ措置ニ依リ、營國ハ、二ツノ基本原則、即チ船型ノ簡素化及ビ一造船型主義ノ採用ヲ通ジ造船業ノ積極的擴大ニ對スル責任ヲ負擔スルコト、ナツタ、(尙詳細ハ附録第四頁参照)

○造船統制會、造船統制會ハコノ工業ニ於ケル諸統制會ヲ指揮スル中央機關デアアル(コノ會ニハ附屬トシテ關係産業統制會ヲ包含スル諮問協會ガ存在スル)造船統制會ハ重點主義ニ則リ資材ヲ供給スル事務ヲ援助スル、中央ノ造船統制會ニ加盟シ居ルモノニ中小業者ヨリ組織サレタ。地域別造船諮問會ガ五ツ存在スル、コノ統制會ハ一九四二年ニ設立セラレ、會長ハ斯波孝四郎(前三菱重工業會長)常務理事ハ(豫備役)海軍中將桑原重治デアアル。

日本側ノ半官消息通ノ傳フル所ニ依レバ造船統制會ハ、一九四一年九月發布ノ重要産業團體令ニ從ツテ東京ニ設立サレタ國力増進ニ對スル企業機關ノ一ツデアルトイフコノ會ノ會員ハ次ノ條件ニ基イテ海軍省(以前ニハ通信省)ニ依リ指名サレタ。

(1) 長サ一〇〇米以上ノ船ヲ建造シ又ハ船用機關ヲ建造シ又ハ兩者ヲ建造スル造船會社ハ會員トシテ入會シ得ルコト。

(2) 上記ノ要件ヲ具ヘナイ造船事業主ハ入會ヲ許サレナイ

(3) 前項規定ノ長サノ船舶ニ對スル部分品ヲ製造又ハ修理スル事業主ハ會員トシテ入會スルコトガ出來ル

(4) 上記規定ニ對スル例外ハ海軍省（以前ニハ通信省）ノ許可ヲ得テ作ルコトガ出來ル。

(1) 統制會ノ主ナル目的ハ日本政府ノ國家計畫ノ枠内ニテ船舶ヲ建造修理スルコトニアル。此ノ計畫ヲ實施スルタメニ統制會ハ又必要ナル原料ヲ確保シ且ツ熟練技術ヲ充用スルノ要ガアル造船統制會ノ重要職員ニハ會長、理事長、若干ノ理事、若干ノ監事及ビ若干ノ顧問ガアル。會長ハ海軍大臣（從前ハ遞信大臣）ガ之ヲ任命スル。理事長及ビ各會長ガ之ヲ任命スルガ、ソノ際同大臣ノ承認ヲ必要トスル。同大臣ハ適當ト

(4) 上記規定ニ對スル例外ハ海軍省（以前ニハ通信省）ノ許可ヲ得テ作ルコトガ出來ル。

認めル時ハ造船統制會ノ解散ヲ命ズルコトガ出來ルノデアアル。統制會ハ毎年度終了後二ヶ月以内ニソノ總本部ニ於テ年次會合ヲ開催スル。臨時會合ハ會長ノ提議ニヨリ招集シ得ル。會員タル各組織体ハ、建造ノ進捗度修理中ノ船舶ノ情況ソノ船舶ノ裝備ノ性質支所ノ新設或ハ其ノ他船舶ソノモノ、勞働、資本、計畫等ニ關聯スル種々ノ變動ニ就キ、總本部ニ報告ヲ爲ス要ガアル。(造船統制會會員名簿ニ就テハ附録IV(参照))

D 木造船建造ニ於ケル地方聯合体(組合)

戰爭ノ勃發當時日本ノ木造船建造工業ハ三千以上ノ造船所ヨリ構成サレテ居リ其ノ大部分ハ雇傭勞務者十名以下デ舊來ノ手工業的方法ニヨリ小船舶ヲ建造シテ居ルモノデアツタ。之等ヲ統合擴張シテ有用ナ大サヲ有スル貨物船廠ヲ建造シ得ル工業タラシメルニハ此ノ工業ノ強力ナ再組織ヲ必要トシタ。

其ノ第一段階ハ政府ノ一元的統制ノ下ニ之等造船所ヲ強制的ニ統合スルコトデアツタ。三千ノ造船所ハ合同ニ依リ六百ニ減ジ、之亦四十一

ノ地方聯合体即チ組合（總テノ都市縣、農村縣ヲ通ジテ）ニ組織サレタ。之等木造船組合ハ更ニ單一ノ日本木造船組合聯合會ニ組織サレタ。

次デ日本木造船組合聯合會（後ニ、「經濟新體制」ノ下ニ造船統制會ニ合同又ハ參加シタ）ガ、遞信省（後ニハ恐ラク海軍省）ノ直接ノ統制下ニ、各會社ニ標準仕様書ニ從ツテ設計サレタ木造船ノソノ擔當スベキ分ヲ割當テタ。鋼船建造ノ統制ニ當ル海軍ハ五十米以下ノ船舶ノ建造ニモ、機材ヤ機裝部品ノ供給ト同様、之ニ對スル監督權ヲ與ヘラレテキタ。原材料、機械類工具類等ハ國家經濟動員計畫ノ下ニ割當ガ行ハレルコトニナツテキタ。低利ノ資金供給ト生産褒獎金トハ金融面ヨリ刺戟ヲ與ヘタ。

抜 萃

- IV 二三九、IV 二五二
- IV 二五七 頁
- IV 二五九 I IV 二六九 頁